

書評

坂井建雄 監訳
小林 靖・小林直人・市村浩一郎 訳
グラント解剖学図譜
英語版 CD-ROM 付(第5版)
信州大教授・組織発生学
佐々木 克 典

解剖学は古い学問で、すべてがわかってしまっており、新しさの加わることもない領域だと揶揄されることも少なくない。それにも関わらず教科書は改訂され、あるいは新しく書き下ろされ、世に受け入れられているのも事実である。この理由は、解剖の魅力は断片的な知識の集積ではなく、人体構造の“見方”にあるからである。“見方”は無限で、観察する人の個性が著しく反映するものであり、それゆえ数多くの解剖学書が書かれてきた。その中には歴史の中に埋もれたものも少なくないが、時代の変遷に関わらず、改訂を重ねながら永く多くの医学生に影響を与えてきたものもある。その一冊が『グラント解剖学図譜』である。最近、原書第11版を翻訳した日本語第5版が刊行された。

『グラント解剖学図譜』の凄さは、描写された図のはっきりとした斬新さにある。それまで見たことがない、しかし見てみたいと思う部位を憎いほどうまく描き出したリアルな図が数多く挿入されている。それぞれの図の説明は、人体の構造を深く洞察した人では

ければ、決して書くことができないような示唆に富んだものが多い。例えば、“縦隔の右側面は、いわば「青色の面」であり、奇静脈弓や上大静脈といった太い静脈が見られる”という説明を最初に読んだ時、「青色の面」という表現に、電撃に打たれる思いがした。この図譜を描いたGrant JCBは、その前に“Grant's Method of Anatomy”という、読めば知らず微笑んでしまうようなきわめて面白い、しかしアカデミックな解剖書を書いている。グラントの人柄を同僚らは、“物静かな機知と限りない人間愛”と表現しているが、彼の人柄が滲んだこの本が土台となり図譜は作られた。当然その中には機知と人間愛がここかしこに溢れている。これが『グラント解剖学図譜』の個性であり、永く受け入れられてきた理由であろう。

この図譜には常に臨床医学を念頭においたグラントの意図が生きている。私が医学部を卒業し、最初に研修した伊豆の病院で、外科チームのトップがグラントの図譜を紐解いているのを見た時、外科医が使える実践的な図譜であるこ

とを実感できた。外科医がある方向から人体にアプローチする場合、その方向でしか構造は見えてこない。しかし、彼らが見たいのは、まだ見えていないアプローチの先にある構造である。本書はそれを彼らの気持ちになって見せてくれる。また今回、時代の要求に応じ豊富な体表解剖写真と画像診断像が加えられており、この版の大きな特徴になっている。これらの像と解剖図の対比は正確で効果的であり、読者にわかりやすい。選択されている断層画像は人体を考えるうえで重要な面が多く、関連する模式図は適切である。しかし、グラントが生きていれば、少々無味乾燥なこれらの断層写真をさまざまに修飾し生命を与えたかもしれないと考えるのは期待しすぎだろうか。

この図譜の翻訳に監訳者として携わっておられる坂井建雄教授は古今東西の解剖学書にきわめて造詣が深く、数多くの翻訳を手がけてこられた稀代の解剖学者である。彼の豊かな学識に裏付けられた翻訳で、エスプリに富んだグラントの解剖学の真髄は遺憾なく読者に伝えられるであろう。若い感性を持つ医学生に、また人体の構造に常に関心を寄せる臨床医に座右の書にしていただきたい一冊である。

〔A4変型 頁896 2007年
定価15,750円(本体15,000
円+税5%) 医学書院刊〕

* * *